

「聴耳」説話の形成と展開

— 中世期の説話を中心として —

はじめに

昔話「聴耳」について梗概を簡単に提示するなら、「主人公がある契機から動物の言葉を解すことのできる呪宝を獲得し、呪宝の機能を使い動物の言葉を解して庄屋の娘等の病気を治し幸福になる物語」とひとまずは規定できるだろう。またこの昔話は、現在学問上「呪宝譚」として話型分類され、物語の中の呪宝の登場及びその機能が、話の主要な特徴つまり、主要モチーフだとされている⁽¹⁾。

ではこの話が、現在の伝承資料や過去の記載説話において今述べた見方のみで捉えられるのであろうか。例えば、鹿児島県徳之島では次のような報告がある。

昔ある所に、生まれつき正直な鳥野公という人があった。ある日、鳥野公は隣り村へ遊びに出かけた。すると途中で人

がたくさん集まっているので、行つて見ると部落の人達だった。あまり大騒ぎしているのでたずねてみると、「子供が家から出て、はや一週間にもなるが、家に帰らないので子供を捜しているのです」と答えた。それから鳥野公はその場をすぎればらく行くと、松の木の上で鳥がカアカアと鳴いているので、その鳥野公と云う人は、鳥の鳴声はみなわかる人だったので、その場に立って、鳥がカアカアと鳴いているのを聞いた。すると鳥がいう事には、向うの竹やぶに子供が死んでいるという。そこで鳥野公は、さっきの子供に違いないと思って、後に引き返し部落の人に、「向うの竹やぶで子供が死んでいますよ」と教えた。子供の親や部落の人はびっくりしてその場にかけてみると、捜している子供だった。村の人達は、泣く泣く子供の死骸を以て帰った。鳥野公が歩いていると後から、「もしもし」と呼ぶ声があるので振り返ってみると、村の人達だった。鳥野公が用件を聞くと、「お前が子供を殺して竹やぶになげすてたのだから」と子供の父親らし

佐藤 優

い人が言った。そして、「さあ警察にいこう」と言っ引っぱって行った。鳥野公と一緒に警察署に行き、「私は生まれ七十七歳になるまで、悪い事をしたり、嘘を言ったりした事はありません」と述べた。それから裁判所へまわされたが、鳥野公がいくら、「自分は殺さない。自分は鳥の鳴き声を聞いてわかったのだ」と言っても承知せず、何月何日何時に死刑にすると言いわたした。そこで鳥野公は、「一日なりとも妻や子供に会わせて下さい」と願ひ出た。その時、裁判所の庭に雀が集まって、盛んに飛んだり鳴いたりしていた。裁判官は、その雀を見て気がつき、「鳥野公、お前は鳥の鳴き声がわかるのなら、あの雀がなんと言っているかわかるだろう」と言った。すると鳥野公が、「あの雀は、『向うの橋の上に荷車が倒れて、米俵破れて米がこぼれているから、それを食べに行くからみんな集まれ』と言っているのだ」と言った。裁判官は、さっそく橋へ行ってみると米がこぼれていた。そこで鳥野公が正直であった事がわかり、無罪になったという。「正直は一生の宝」という事はこの事だ。⁽²⁾

幾分近代化されてしまった話である。採集時期は、昭和二十二年（一九四七）から昭和二十九年（一九五四）にかけて奄美の高等女学校の生徒によって採集されたとある。話者は、明治十三年生まれの森太郎氏と記載されている。この話でまず注目されることは、主人公が「鳥野公」という人物であり、呪

宝を用いず鳥の言葉を理解している。この他にも、管見の限り、呪宝を使わない事例が十一例確認できた。⁽³⁾ よって、昔話「聴耳」の主要モチーフと位置付けられている呪宝使用の部分で欠いた事例も伝承されているといえる。

そこで本稿においては、上記の問題意識に基づき、昔話「聴耳」の主要モチーフが記載説話においてどのような機能を有していたのかを考察することを目的とする。具体的には、主要モチーフの内「動物の言葉を解す」部分が、記載説話の中ではどのように表現されているのかを院政期から南北朝期の悉曇学資料と室町期の天台宗における法華経注釈書を中心に検討してみる。

また今回中世の文献⁽⁴⁾を中心に検討する理由は、中国古代から日本の中世初頭までは、柳瀬喜代志氏「柳瀬 一九八五」及び、中世末期から近世期に関しては渡辺守邦氏「渡辺 一九八四」の詳細な研究が既に存在するからである。よって本稿では、上記の研究を加味しながらも両氏があまり触れていない中世期の文献を中心に検討してみる。そして通時的見地からこのモチーフが、個々の説話の中でどのように機能していたのか考察してみた。

一、先行研究の紹介

ではまず、今触れた両氏の研究を整理することから始めたい。

まず柳瀬氏の研究から見てゆくことにする。なお、両氏の論文の引用は初出のものとし頁数もそれに準拠する。

柳瀬論文では、柳田國男の「鳥言葉の話」を整理しながら、中国古典籍に記載された「聴耳」説話を「解鳥語譚」と名付けそれを紹介しながらその成立過程や特異性について論じている。柳瀬氏は、『史記』や『春秋左伝』に記載されている「解鳥語譚」の話が持つ意味合いと現在伝承されている昔話「聴耳」や三国六朝期以降のそれとを「価値を異にする別種の思潮を土壌として語られたもの」として区別しておられる(一八一頁)。

具体的に見てみると、前者においては「動物ことばに通じていたとの記述は、城外の人の知能を異聞として扱っているに過ぎない」(一八一頁)とし、動物の言葉解する能力は野蛮な民族の特異性を表わすものとして扱っている。そして、こうした見地は「漢代知識人の伝統的な考え」と位置付けている。しかし後者の時代になると、事情は変化してくると述べている。ここでは、物語性を備えた「解鳥語譚」が登場しそこで語られることは「人の特殊な才能を語るようになって」(一八二頁)いるとする。

そして、特に流布した物語として『論語義疏』に記された公冶長の「解鳥語譚」を挙げている。この説話は、日本にも伝わり各種の『論語』注釈書などから受容されていたとする。また、梁代に制作された經典に『経律異相』にも「解鳥語譚」があることを指摘しておられ、これが鎌倉期に成立した仏教の類

書『金言類聚抄』に引かれていることも触れている。つまり、『論語義疏』以外にも仏典記載の「解鳥語譚」の日本へ受容も見ておられる。

また、昔話「聴耳」については、呪宝の多様性を挙げそれは「咒宝とその獲得の方途に対する伝承者の興趣の深さを示している」(二八〇頁)とし、「超人の才能や習練に「鳥言葉」を解く力の獲得を認めず、不思議な働きを持つ道具である咒宝にのみ認めるといふ、道具を万能とする語り手の意識も注目に値する現象」(二八〇頁)とする。

しかし、冒頭に示した昔話の事例のように呪宝が登場しない話もいくらか採集されているので、語り手すべてが道具万能という見解にない事は指摘してよいだろう。そして呪宝については語り手の興味よりも民俗文化の中での呪宝とされるモノの表象性を考えた方がよさそうである。また、「その類(≡公冶長の「解鳥語譚」…佐藤記)と見るべき昔話は採集されていない」(二八六頁)とするが冒頭に紹介した話は、まさにそれであり疑問が残る。

次に渡辺氏の研究を概観しておきたい。渡辺氏は、陰陽師安倍晴明の伝承について、近世期仮名草子として成立した『安倍晴明物語』の原初を、歴占の秘伝書『篋篋抄』の抄物『篋篋抄』に求めておられる。渡辺氏に拠ると『篋篋抄』成立ははつきりとは判らず、大胆な推測としながらその成立を「室町期も中期までは溯らないが、それほど遅くない時期の成立」(二四頁)

とされている。

そして、第三節「天正寺猫嶋」で『篋篋抄』と『臥雲日件録』の抄物『臥雲日件録抜尤』に出てくる「聴耳」説話を比較し次のように述べている。「『臥雲日件録抜尤』には、龍宮の耳葉に相当する靈宝が現われない。(中略)むしろ欠落は抄出のしからしめたものと考えざるならば、異伝の一であり、「聴耳づきん」の最古の例とすることができよう」(二八頁)とされている。はたして、『臥雲日件録抜尤』の靈宝の欠落は、この書の抄物という性質がもたらしたものであろうか。以下、中期期の「聴耳」説話の様相を具体的に見てみることにしよう。

二、悉曇学における「聴耳」

さて、中世における「聴耳」説話は、悉曇学特に悉曇中興の祖といわれる天台の学僧明覚を中心とした資料群に豊富に見出せる。また近年、中世悉曇学と説話や中世悉曇学が持っていた言語観などを中心に研究が進展していることも見逃しがたい。こうした研究状況から明覚流悉曇学については、「説経道」という観点で柴佳世乃氏がすでに多くの研究を発表されている(柴二〇〇四)。

そこで本節では、悉曇学における「聴耳」資料の検討をしてみることにする。具体的には、柴氏の検討された資料を中心にもう一度「聴耳」説話の観点から再考し、「聴耳」説話が悉曇

学資料においてどのように機能しているのかを考えてみたい。では、まず『悉曇要訣』から順次、見てみよう。

問。世人常云。善解悉曇者鳥獸言語亦能聞知云云。此事实不

答。大日經疏引経云。時劫初獸等亦解人語文。雜宝藏經第二説古自蛙中云。上古畜生皆能人語文。四馬意云。畜生亦欲二色声香味細滑一。亦自相語。但不レ能如人語文。耳入楞伽經四云。諸世界中一切微虫蚊虻等衆生之類。不レ説言語一。共作二自事一而得二成弁一文。阿跋経云。大患。見二世界一蚊虻虫蟻。是等衆生有二言説一而各弁レ事文。薩婆多論云釋抄批九及卷。古時畜生所二以能語一。今時畜生所二以不能語一。謂劫初時先有二人天一。未レ有二三惡一。尽從二人天中一來。以二宿習近一故。是以能語。今時畜生多從二三惡道中一來。是以不能語。既不レ能語。豈有二聞知人一耶

問。仁海僧正解悉曇。故聞二知鳥語一云云。豈非二聞知一耶

答。有人云。彼僧正善解二周易占一。占故能知。非二悉曇之力一云云。況彼僧正不レ窮二悉曇一。何至レ解二鳥語一焉。天台法華疏四釈二畜生一中云。劫初時皆解二聖語一。後飲食異諂心而語皆變。或不レ復能語文。古婆沙第七釈二畜生一云。世界初成時一切衆生尽作二聖語一。後以二飲食過患一。時世転悪諂曲心多。便有二種種語一。乃至有下不二能言一者上文。故云レ不能語者其一類也。語者亦一類也。

『悉曇要訣』は、明覚が康和三年（一一〇一）以後に成立したものとされ、様々な書物を引用しながら悉曇について解説を行っている。さて、冒頭で「問」として「善ク悉曇ヲ解スル者ハ鳥獸ノ言語モ亦タ能ク聞キ知ル云云」が挙げられている。「聴耳」能力を獲得する前提として悉曇学に通じていることが挙げられている。こうした仏語や梵字に精通することつまり、悉曇学を修めることで鳥獸のことはまた解せるという発想は、いかなる出自や根拠を持つのだろうか。このことについて明覚自身の次のような伝承が存在する。

皇代記裏書云、此明覚ハ叡山之住侶也。離山之後、住加州温泉寺也。此人ハ法花之声并悉曇師也。仍聞知鳴音人^⑩也。（傍線＝佐藤記）

明覚は悉曇の師であるが故に動物の鳴き声を理解できた人だと記述されている。柴佳世乃氏は、今示した二つの資料等を比較され、「聴耳」説話と関わりながらも別の位相を示していることとされ「柴 二〇〇四・二五二頁」、世界の始まりの言語世界では、動物と人の言葉が近しく、動物の声は、「畜生」としてでなく、梵語に通ずる聖なる音声と意識された「柴 二〇〇四・二六四頁」と指摘されている。人のことばと動物のことばが、近いという言語観が悉曇学の基底に示されていた

といえるだろう。こうした言語観に基づいたのであるうか、仏典には人が動物の言葉を解する「聴耳」説話の構造とは逆の説話が掲載されている。少し見てみたい。

仏言。昔迦尸国有王。名為惡受。極作非法。苦百姓。殘賊無道。四遠賈客。珍琦勝物。皆稅奪取。不酬其直。由是之故。國中宝物。遂大貴。諸人稱伝。惡名流布。爾時有鸚鵡王。在於林中。聞行路人說王之惡。即自思念。我雖是鳥。尚知其非。今當詣彼為說善道。彼王若聞我語。必作是言。彼鳥之王。猶有善言。奈何人王。（傍線＝佐藤記）

仏在舍衛國。爾時般遮羅國。以五百白鴈。獻波斯匿王。波斯匿王。送著祇桓精舍。衆僧食時。人人乞食。鴈見僧聚。來在前立。仏以一音說法。衆生各得隨類受解。當時群鴈。亦解仏語。聞法歡喜。鳴声相和。還於池水。（傍線＝佐藤記）

両資料とも『悉曇要訣』が引用していた仏典『雜寶藏經』に載るものである。前者の説話では傍線部の箇所、オウムの王が林の中で行人の王の悪政を嘆く声を耳にし、自分は鳥だがこの庶民の声を王に伝え悪政を戒めようとした、ということが書かれている。また後者の説話では、群れた鴈は仏語を解せた

ことが記されている。今取り上げた二つの説話を「聴耳」説話の機能という点で見た場合、人が動物の言葉解すという設定と全く逆の用いられ方をしている点が興味深い。また後者の説話で、人の言葉ではなく鷹が仏語を解せたという発想は、梵語に精通した人つまり、悉曇学を修めた人が、動物の言葉解すことができるという説く『閑語抄』の論理と響きあうものを看取できるといえるだろう。

さて、人と動物の声が近いという発想は、柴氏が指摘するように動物のことはを翻訳するという「聴耳」説話のモチーフのそれと位相を異にするかもしれない。しかしながら、明覚が仏語や梵字に精通していたことで鳥獸のことはを解せたと言ふことは、特異な人物が、呪宝を使用せず自身の持つ特殊な能力（ここでは悉曇学に精通していること）によって動物の声を解すモチーフとして説話の中で機能している点を注目すべきではないか。この点は、現在多く伝承される呪宝を媒体とする「聴耳」説話と性格を異にするが、中世期の「聴耳」説話を考察する上で有効性があるのではないか。では、もう少し時代を下った「聴耳」説話について見てみることにしよう。

三、直談物における「聴耳」

およそ院政期の頃より歌や物語などをはじめとして、様々な事象に対する知的営みとして注釈行為が盛んになっていった。

これについては、近年中世文学研究を中心に多くの研究成果がもたらされている¹³⁾。

こうした状況をふまえて、中世の仏教布教の実態を見てみると、様々な法華経注釈書がそれを講義する談義所（談所）において制作されていたようである。そこでは、講義をする能化と学僧である所化がおり、現在の大学のような形式で法華経などの經典が講じられていた。また、学僧の交流は宗派を超えて盛んであったことが判っている¹⁴⁾。廣田哲通氏に拠れば、天台宗における談義所の数は、現在判明している限り全国におよそ六十箇所あったとされる。「廣田 二〇〇〇・八十頁」そして天台宗における談義所の主な機能は、「談義所の僧が学問研鑽を積んで比叡山の学侶になるという課程」¹⁵⁾「廣田 二〇〇〇・七九頁」にあったようである。

さて、こうした談義所で成立した書物の一群に、直談物と呼ばれる法華経注釈書がある。この一群の書物は、法華経の内容をわかりやすく説明するために制作された。そしてその方法として注目される事項の一つは、「事的叙述において多く説話的内容や和歌が使用される」¹⁶⁾「廣田 一九九三・六六頁」ことが挙げられる。そのわかりやすく法華経を説く方法として、どのように「聴耳」説話が機能していたのか。ではまず、比較的成立の早い『一乗拾玉抄』から順次検討してみよう。

唐土ニコウヤ長ト云人ハ靜律ニ達シテ或ル時、此國ニ敵キガ

可_レ来_ル申ス。是ヲ御門^{ミカド}へ奏門ス。四五日過テ敵キ打入ル。其上ノ云ク、今度ノ敵ノ□向ハ非余事ニ公夜長カ所為也トテ令籠者。然ニ籠中ニシテ是ヨリ南二三里過テ米車カ破ル。是ヲ鳥リ□可_レト食^{マヤ}云テ鳴ク也ト云。依之一、南方へ人ヲ遣シテ見ハ如_レ云カ也。サテハ彼ハ靜律ニ達シタリ。長籠中ヲ出□也云く。是耳根ノ性也⁽¹⁶⁾。

『一乗拾玉抄』は、「長享二年（一四八八）、「防州吉敷郡水上山興隆寺住僧叡海」が類聚、五年後の明応二年（一四九三）、「常陸国信太庄若栗郷北宿坊」に於いて「傳海」が書写」「中野一九九八・四頁」したとされる。今引用した部分は、法華經の法師功德品について説いた箇所のものである。そしてその功德とは、仏教の六根清淨（六根淨ともいう）のことである。六根清淨とは、「六根淨ともいう。眼・耳・鼻・舌・身・意の六根（六つの器官）がけがれを払って清らかになること。人間の身心が種々の功德に満ちて清淨になること⁽¹⁷⁾」であり、ここでは聴覺が清らかになると様々な事象について理解することができる具体例として公治長の「聴耳」説話が引かれている。

では、前代から伝承されてきた公治長の「聴耳」説話と相違点はあるのか。前節で触れた渡辺氏の指摘されている『論語義疏』の本文と比較してみよう。

別有一書、名之為論釈、云、公治長從衛還魯、行至二塚上、

聞鳥相呼往清溪食死人肉、須臾見一老嫗当道而哭、治長問之、嫗曰、兎前日出行、于今不反、当是已死亡、不知所在、治長曰、向聞鳥相呼往清溪食肉、恐是嫗兒也、嫗往看、即得其兒、已死、即嫗告村司、村司問嫗從何得知之、嫗曰、兎治長道如此、村官曰、治長不殺人、何緣知之、囚録治長付獄主、問治長何以殺人、治長曰、解鳥語、不殺人、主曰、當試之、若必解鳥語、便相放也、若不解、當令償死、駐治長在獄六十日、卒日、有雀子緣獄柵上、相呼嘖嘖洗洗、治長含笑、吏啓主治長笑雀語、是似解鳥語、主教問治長、雀何所道而笑之、治長曰、雀嘖嘖洗洗、白蓮水辺有車翻覆黍粟、牡牛折角、收斂不尽、相呼往啄、獄主未信、遣人往看、果如其言、後又解猪及燕語、屢驗、於是得放、

然此語乃出雜書、未必可信、而亦古旧相伝云治長解鳥語、故聊記之⁽¹⁸⁾、

公治長が拘束される理由が、『論語義疏』では行方不明の子が死んでいることとその場所を特定したことであるのに対し、『一乗拾玉抄』では四、五日後に敵が攻めてくることを予言しの中させたことが公治長の謀略だと見なされ拘束を受けている。今挙げた点以外でも若干の相違はあるにせよ、この箇所だけが大きな相違点といってよいだろう。

ではなぜ改変されたのか。わかりやすく法華經の内容を説くことに直談物の特徴があるとすれば、『一乗拾玉抄』が書写さ

れた時代は、まさに戦乱の世たけなわである。よつて改変は、直談物が背景に持つ時代性を端的に表わしたものとといえるのではないか。

さて、この後『一乗拾玉抄』記載の公治長が登場する「聴耳」説話は、時を経てほぼ同内容で書写されていった。⁽¹⁹⁾しかしながら『直談因縁集』では少し様子が違っている。本文を検討してみよう。

一、六根浄^{ニ付テ}。書写、性空上人、叶六根浄^{ニ御人}也。有時、山門^ヲ、雀、多飛通^ル時、声^ヲ聞^テ。此雀^ハ、坂本^ニ、馬臥^マ。米^カコホル、ヲ、往^テ食^シ、ト鳴也、ト云。或^ハ笑人^モ有^之。但^シ、ト云テ、下^テ見^ルニ、聽^テ馬臥^シ、米^コホル、ト云。⁽²⁰⁾

説話の機能という面では、やはり『一乗拾玉抄』などと同じであるが、公治長の「聴耳」説話から性空上人が聴耳の持ち主として登場してくることは注目されるだろう。性空上人とは、平安時代中期の僧で十歳の時『法華経』読み始め、後に播磨国書写山に籠居した。そして、花山天皇が二度行幸するなど都人との接点が多分にあつたとされる。⁽²¹⁾また、奇談的説話を多く残していることも注意される。では『直談因縁集』での主人公改変理由はいかなるものであつたのか。

『直談因縁集』の注釈態度について、注二十書の卷末類話索引を見ると様々な説話や物語世界との交流を見透かすことがで

きる。例えば巻三―十八話では、鬼の呪室に関する話、巻五―七話では諏訪縁起の甲賀三郎譚との類似が指摘され、巻五―一話では昔話「猿の生肝」(別称「海月骨なし」)との類似も見出せる。⁽²²⁾この様な『直談因縁集』の多様な説話世界の交流は、中世説話世界において書承の基層に口承があつたという単純な文化の受容形態ではなく、語り(唱導など)も媒介としながら文字説話が重なり合つて存在していた「黒田 一九九三・四二―四三頁」ことの証左として受け止められるだろう。また、談義所で学問を修めた僧達はその知識を一般庶民へ伝えることが行われていた「酒井 一九九六・一〇八頁」という指摘を加味するなら、直談物の世界と口承世界との漸次的交流もまた見通すことができるだろう。こうした多種多層な背景が、「聴耳」説話の主人公を変化させた因として求められのではないか。⁽²⁴⁾

以上、天台宗の直談物を中心に中世説話における「聴耳」説話の展開を見てみた。室町期においては仏教、特に天台宗の直談物に「聴耳」説話が積極的に受容されていくことが確認できた。また、仏教概念六根清浄の体現者として性空上人が公治長と共に「聴耳」の持ち主として説話世界に登場するなど、多少の変遷を辿りながらも「聴耳」説話が室町期を通じて天台の直談の場で語られていたといえるだろう。そしてその中でも、呪室は登場せず特異な人物の聴耳能力であつたと結論づけられる。

おわりに

今まで考察してきたように「聴耳」説話は、儒仏文化を背景として、それが説かれる文字の世界で積極的に受容及び享受されたことが窺える。そして説話の中では、中世期まで主として特異な人物が特に呪宝を使用せず、自身の持つ特異な能力によって動物の声を解す機能を担うことが多かったことは重要な事実であろう。また中世期における「聴耳」説話は、悉曇学における言語観や法華経の功德を説明する道具立てとしても機能していたことも確認できた。

そして通時的に見た場合、「聴耳」説話が現在伝承されているような「呪宝譚」の様相を呈するのは、近世期に入ってから漸次説話モチーフとして文字及び口頭で伝播・伝承が拡大していったと推察してよいのではなからうか。

このような点をふまえるなら、現在昔話として伝承されている「聴耳」説話と中世期までのそれとは少し位相を異にしているといつてよいだろう。第一節末尾で触れた渡辺氏の指摘のように、中世期の呪宝を用いない「聴耳」説話と現在のもと同じ一視するよりは、なぜ近世期になり動物言葉を聴く媒体として呪宝が登場してくるのか、という説話の変化を考察する視点が今後必要かつ重要になってくるのではなからうか。上記の観点は、「聴耳」説話が昔話として口承化されていた近世期のメ

ディアとしてのオーラルの捉え方も考察の対象となり得るだろう。また、より根源的な問題として鳥や動物の声を聴き、それらを人がことばとして捉える発想すなわち、聴きなしの問題とも合わせて多面的な視野から「聴耳」説話について今後検討の必要がある。本稿は、その為の一つの小さな布石である。

注

- (1) 関敬吾氏『日本昔話大成』第三卷（一九七八）角川書店二八八―三〇九頁・稲田浩二氏『日本昔話通観』第二十八卷（一九八八）同朋舎二七九頁を参照。
- (2) 田畑英勝氏編『奄美大島昔話集』（『全国昔話資料集成』十五）（一九七五）岩崎美術社一三三―一三四頁）
- (3) 本文記載事例以外で以下の事例が得られた。なお町村名は、旧名であることを付記しておく。秋田県北秋田郡阿仁町（秋田県文化財保護協会阿仁町支部「阿仁町伝承夜話」第四集 一九七五）阿仁町教育委員会・秋田県仙北郡角館町（武藤鉄城氏「角館昔話集」一九七五）岩崎美術社・岩手県下閉伊郡岩泉町（高橋貞子氏編・平野直氏監修「火つこをたんもうれ―岩泉のむかし話―」一九七七）熊谷印刷出版部・宮城県牡鹿郡女川町（岩崎としゑ氏「日本昔話」一九七七）自刊・山形県飽海郡松山町（清野久雄氏編『庄内昔話集』（『全国昔話資料集成』三十七）一九八四）岩崎美術社・福島県田村郡船引町（船

引町教育委員会編刊『ふねひきのざつと昔』一九八〇・埼玉県入間郡毛呂山町(池上真理子氏編)『武蔵の昔話』(『日本の昔話』二十八)一九七九 日本放送出版協会)・長野県上水内郡中条村(小林朱美氏「信濃上水内の昔話」(『昔話研究懇話会編』『昔話―研究と資料―』六)一九七七 三弥井書店)・富山県射水郡小杉町(伊藤曙覧氏編)『越中射水の昔話』(『昔話研究資料叢書』六)一九七一 三弥井書店)・鹿児島県大島郡徳之島町(福田晃氏編)『徳之島の昔話』(『南島昔話叢書』三)一九八四 同朋舎出版)以下本稿で用いる「中世」という時代意識は、以下論じる注釈という営為が盛んになる院政期を含めたものである。歴史的時代性よりも文化史的側面を意識した用い方である。この意識については、下記の文献の諸論考を参照願いたい。(二)谷邦明・小峯和明両氏編『中世の知と学(注釈)を読む』(一九九七 森話社)・院政期文化研究会編『院政期文化論集』全五巻(二〇〇一〜二〇〇五 森話社)

- (5) このことについては、日本昔話学会編『昔話と呪物・呪宝』(『昔話―研究と資料―』第二十五号)一九九七 三弥井書店)に掲載された呪宝譚に関する各論考が参考になる。
- (6) 『竈篋抄』では、「龍宮ニテ烏葉ヲ耳ニツケ給フ。無_レ程、元ノ鹿島ニ帰り、諸鳥ノ囀ヲ聞クニ、能ク聞知ル也。」(深沢徹責任編集『日本古典偽書叢刊』第三巻(二〇〇四

現代思潮新社一七四〜一七七頁)より引用。)と記され、以下で現在伝承されている昔話「聴耳」と同じ展開をしている。『臥雲日件録抜尤』は、応仁元年(一四六七)の記事に次のような記述がある。

紹蔵主来。又居_二天王寺_一。或時聽_二鳥相語_一。一鳥則自_二京祇園_一来。一鳥自_レ本栖_二于此里_一二者也。此時天皇不豫。祇園鳥曰内里西北中。有_二一銅器_一久埋_二地中_一。有_レ靈。天皇不豫為_レ祟云々。請明聽_レ之。上京療_二治帝病_一。遂発_レ名為_二天下无雙陰陽師_一也。請明无_二父母_一。蓋化生者也。其廟在_二奥州_一云々。(史籍集覽研究会『統史籍集覽』第三冊(一九七〇 すみや書房 四九六頁)より引用。)

ここでは、呪宝らしきものを媒介せずにカラスの鳴き声を聞いている。

- (7) 明覚の学的詳細については、馬淵和夫氏『日本韻学史の研究』I(一九六二 日本学術振興会 四〇二〜四八一頁)を参照。
- (8) 近年中世悉曇学に関しては、説話文学研究者の豊富かつ示唆に富む研究が相次いで提示されている。小川豊生氏「夢想する《和語》―中世の歴史叙述と文字の神話学―」(『日本文学』第四十六巻第七号 一九九七 日本文学協会)・同氏「幻像の悉曇―梵・漢・和三国言語観をめぐって―」(『国文学』第四十五巻第十号 二〇〇〇 至

文堂)・伊藤聡氏「梵・漢・和語同一観の成立基盤」(院政期文化研究会編『権力と文化』(院政期文化論集)第一巻)二〇〇一 森話社)などを参照。

(9) 『悉曇要訣』第四(『大正新脩大藏經』第八十四卷五六六～五六七頁)

(10) 園城寺法明院藏『閑語抄』(柴 二〇〇四・三六二頁)成立に関しては、永和四年(一二六七)俊誉によってまとめられたもの。「柴 二〇〇四・二五〇頁」

(11) 『雜宝藏經』第八(『大正新脩大藏經』第四卷 四八五頁)

(12) 注(11) 書 四八八頁

(13) 注(4)掲載文献や石川透氏『室町物語と古注釈』(二〇〇二 三弥井書店)等を参照。

(14) 『岩波仏教辞典(第二版)』二〇〇二 岩波書店 六九一～六九二頁

(15) 「談義」・「直談」の概念については、仏教説話研究者の間でも明確に概念が統一されていないようである。廣田氏は自身がこの二つの用語についてどのような概念を持っているかを経験的に「直談を談義に包摂される概念としてとらえてきたところがあるようである」と述べている。

「廣田 二〇〇〇・一〇四頁」また、「直談」の趣旨を『法華経直談書』の序文から平俗に説くことを旨としていたと規定されている。「廣田 二〇〇〇・一〇五頁」本稿では、「談義」、「直談」の定位が目的ではないので、とりあ

えず現時点での一般認識である「平易に説く」ことが「談義」・「直談」であるとの見解で論を進める。なお、この議論については、渡辺麻理子氏の一連の論考を参照願いたい。

(16) 『一乗拾玉抄(叡山文庫影印)』(一九九八 臨川書店 六一一頁)なお本文は、影印本を佐藤が翻刻したものである。句読点は、私的に付した。また□は、難読のため翻刻出来なかった箇所であり、随所に誤謬もあると思われる。御教示いただけると幸いです。

(17) 中村元氏『広説仏教語大辞典』下(二〇〇一 東京書籍 一七七八頁)より引用。

(18) 武内義雄氏『武内義雄著作集』第一卷 一九七八 角川書店一三七頁

(19) 永正九年(一五二二)成立の『法華経ほっけきよつじゆりんしゅうしやう林拾葉鈔』や天文十五年(一五四六)成立の『法華経直談鈔』では、物語性を増すがほぼ同内容の「聴耳」説話を記載している。五十年以上も同様の説話が、法華経の同箇所の注釈として存在しかつ、三書が別々の地域で編纂・書写されている。直談物の書写過程及び説話の伝播としても興味ある問題である。

(20) 廣田哲通氏他編『日光天海藏直談因縁集―翻刻と索引―』(一九九八 和泉書院 二四一～二四二頁)『直談因縁集』の成立は、天正十三年(一五八五)である。

(21) 『国史大辞典』第七卷 一九八六 吉川弘文館 四九一頁

(22) 例えば、『今昔物語集』巻第十二第三十四話「書写山性空聖人語」では、出生時「其ノ兒左ノ手ヲ捲テ生タリ。父母怪ムデ、強ニ開テ見レバ、一ノ針ヲ捲レリ。」(馬淵和夫氏他校注・訳『今昔物語集』一(『新編日本古典文学全集』三十五)一(一九九九 小学館 二五二頁)から引用)と語られている。そして、性空上人は六根清浄の体現者として、様々な説話で語られている(例えば、『古事談』巻第三一九十一話・『古事談』巻第三一九十六話・『元亨釈書』巻第十一など)。また、耳根体現者の例として『徒然草』第六十九段に豆が煮える音や豆殻を煎る音をことばとして聴き取る「聴耳」説話がある。性空上人以外の中期における「聴耳」説話としては、『閑居友』下五―七「唐土の人、馬・牛の物憂うる聞て発心する事」に馬と牛のことばを解する人の話がある。いずれの説話においても、呪宝的なモノを媒介として動物の声を人間のことに換言してはいない。

(23) 巻五―第一話は、このほか『今昔物語集』や『経律異相』なども類話として挙げられている。よって、当該話が口承の話を取り入れたと断定するのは、早計であり避けるべきであろう。なおこの昔話の月中の比較研究としては、立石展大氏「『猿の生き肝』の変遷」(日本昔話学会編『昔話と呪物・呪宝』〈『昔話―研究と資料―』第二十五号)

一九九七 三弥井書店)が参考になる。

(24) このことについては、まだ十分な調査・検討の余地が残され今後の検討課題である。

引用・参考文献

- 大場朗 一九九七「性空説話と『摩訶止観』―法名「性空」と「六根清浄譚」の源流―」(大正大学大学院文学研究科編・刊『国文学試論』第十三号)
- 尾上寛伸 一九六〇「中古天台に於ける談義所」(日本印度学仏教学会編・刊『印度学仏教学研究』第八巻第一号)
- 一九六一「談義所と天台教学の流伝」(『叡山学報』再刊第一巻 叡山学会)
- 一九七〇「関東の天台宗談義所(中)」(『金沢文庫研究』第十六巻第四号 金沢文庫)
- 川村湊 一九九〇『言霊と他界』講談社(講談社学術文庫として二〇〇二年に同タイトルで再刊)
- 金文京 一九九〇[A little bird told me]―公治長解鳥語考(慶應義塾大学言語文化研究所編・刊『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第二十二号)
- 桑椹子 一九八七「狐女房譚考―書承より口承の可能性―」(大谷大学大学院編・刊『大谷大学大学院研究紀要』第四号)
- 黒田彰 一九九三「注釈」(本田義憲他編『説話の場』〈『説話の講座』三 勉誠社))

小池淳一 一九九三「陰陽道系説話の展開と位相」(日本口承
文藝学会編・刊『口承文藝研究』第十六号)

—— 一九九七「鬼の呪宝の系譜」(日本昔話学会編『昔
話と呪物・呪宝』〈昔話―研究と資料―』第二十五号)三弥
井書店)

小峯和明 二〇〇〇「中世仏伝集」解題」(国文学研究資料館
編『中世仏伝集』〈真福寺善本叢書』第五卷)臨川書店)

酒井綾子 一九九六「法華経直談鈔」の説話」(大正大学出版
部編、刊『大正大学大学院研究論集』第二十号)

柴佳世乃 二〇〇一「読経道の説話形成―明覚流を基点として
―」(仏教文学会編、刊『仏教文学』第二十五号↓柴佳世乃「読
経道の研究」〈二〇〇四 風間書房)に再録)

高橋均 一九八九「日本における「論語義疏」の受容」(高校
通信東書国語)東京書籍)

竹原威滋 一九九七「ヨーロッパの昔話における呪物・呪宝」
(日本昔話学会編『昔話と呪物・呪宝』〈昔話―研究と資料―』
第二十五号)三弥井書店)

徳田和夫 一九八七「民間説話と古文獻―『月菴醉醒記』の「猫
と茶釜の蓋」「くらげ骨なし」を紹介しつつ―」(荒木博之他
編『民間説話の研究』同朋舎出版)

—— 一九八八「蛙草紙」絵巻の成立」(徳田和夫「お伽
草子研究」三弥井書店)

—— 一九九六「動物に宣命を含める話―お伽草子」横座

房物語」論その1」(学習院女子短期大学編・刊『国語国
文論集』第二十五号)

—— 一九九七「もの言う動物の話―お伽草子」横座房物
語」論(承前)―」(学習院女子短期大学国語国文学会編・
刊『国語国文論集』第二十六号)

—— 二〇〇一「中世民間説話と『蛙草紙絵巻』」(学習院
女子大学編・刊『学習院女子大学紀要』第三号)

—— 二〇〇四「鳥獣草木譚の中世―もの言う動物」説
話とお伽草子『横座房物語』―」(福田晃他編『口頭伝承(ヨ
ミ・カタリ・ハナシ)の世界』〈講座日本の伝承文学』第十
卷)三弥井書店)

中野真麻理 一九九八「一乗拾玉抄の研究」臨川書店

林雅彦 一九七二「中世における性空上人説話について」(中
世文学会編・刊『中世文学』第十七号↓林雅彦「穢土を厭
ひて浄土へ参らむ」〈一九九五 名著出版)に再録)

—— 一九七三「性空上人攷覚書」(学習院女子短期大学
紀要)第十一号 学習院女子短期大学)

—— 一九七四「性空上人説話攷」(学習院女子短期大学
国語国文学会編・刊『国語国文学論集』第三号)

廣田哲通 一九九三「中世法華経注釈書の研究」笠間書院

—— 二〇〇〇「中世仏教文学の研究」和泉書院

丸山顕徳 一九九七「昔話における呪物・呪宝」(日本昔話
学会編『昔話と呪物・呪宝』〈昔話―研究と資料―』第

二十五号) 三弥井書店↓丸山顕徳『古代文学と琉球説話』

二〇〇五 三弥井書店)に再録)

宮田登 一九九二「言霊信仰」(祖父江孝男編『人間を考える』

放送大学教育振興会↓宮田登「宮田登日本を語る」第四卷

二〇〇六 吉川弘文館)に「俗信の諸相」の一節として再録)

柳田國男 一九三七「鳥言葉の昔話」(『昔話研究』第二卷、第

九号 民間伝承の会) ↓「昔話と文学」(柳田國男『柳田國

男全集』第九卷 一九九八 筑摩書房)等に再録

柳瀬喜代志 一九八五「解鳥語譚考」(早稲田大学大学院文学

研究科編・刊『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第三十

輯↓柳瀬喜代志『日中古典文學論考』(一九九九 汲古書院)

に再録)

—— 一九九三「蒙求和歌・百詠和歌」(本田義憲他編『説

話集の世界』Ⅱ〈説話の講座〉第五卷 勉誠社)

渡辺麻里子 二〇〇〇「法華経注釈書の位相」(仏教文学会編・

刊『仏教文学』第二十四号)

—— 二〇〇二「談義書(直談抄)の位相」(中世文学会編・

刊『中世文学』第四十七号)

—— 二〇〇四「鷲林拾葉鈔」と『轍塵抄』(『印度学仏

教学研究』第五十二卷第二号 日本印度学仏教学会)

渡辺守邦 一九八四「清明伝承の成立」『篋篋抄』の「由来」

の章を中心に(『東京大学国語国文学会編『国語と国文学』

第六十一卷第二号 至文堂↓『仮名草子の基底』(一九八六

勉誠社)に再録)

—— 一九八八「篋篋抄」以前(『国文学研究資料館編・

刊『国文学研究資料館紀要』第十四号)

—— 一九八九「狐の子別れ」文芸の系譜(『国文学研究

資料館編・刊『国文学研究資料館紀要』第十五号)

〈付記〉

本稿は、二〇〇七年一月十日に國學院大學大学院に提出した
修士論文を基に第二節を増補し、二〇〇七年六月三日弘前学院
大学で開催された、日本口承文芸学会第三十一回大会での発表
を再構成し執筆しました。また、伝承文学研究会の皆様にも本
稿執筆にあたり多くの御教示をいただきました。関係各位に御
礼申し上げます。ありがとうございました。

(やとう・まさる／昔話伝説研究会)